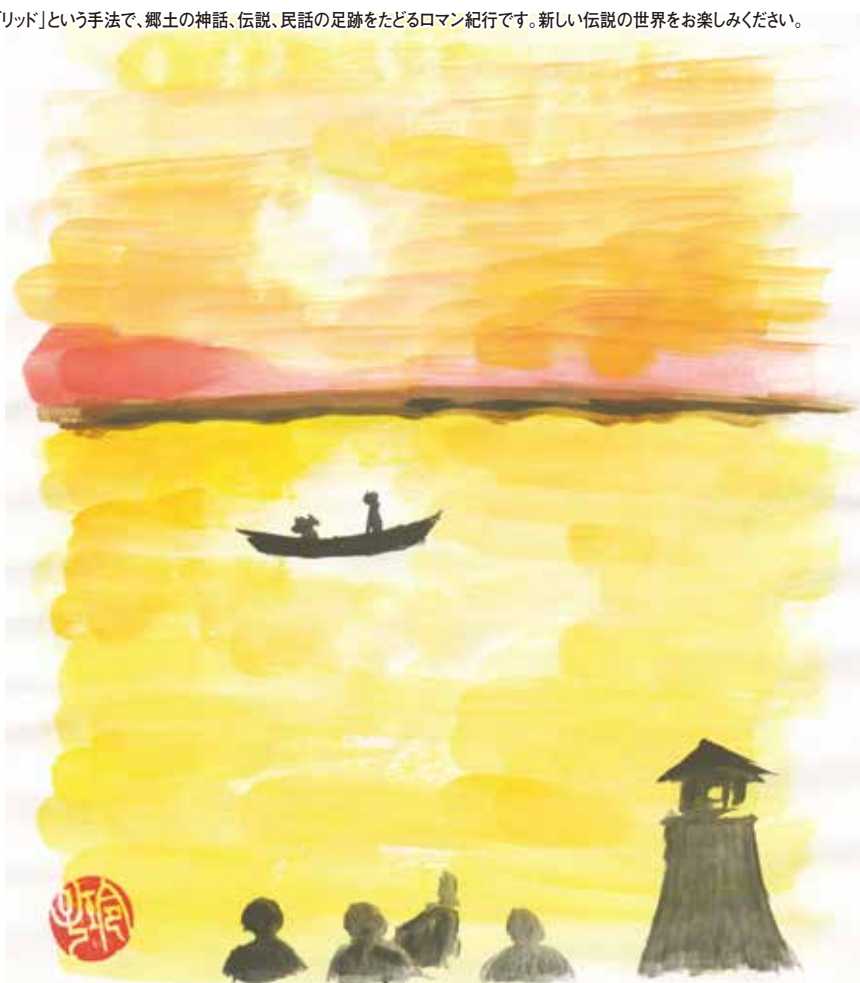


●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 45

シーボルト伝説

伝説
そぞろ歩き
シーボルト
江戸の帰りに
熱田入り
浮舟たゆたう
七里の渡し



地元の学者がシーボルトから薫陶 七里の渡しはシーボルト見送りの地

今回は、あのシーボルトが名古屋を訪れて、七里の渡しで桑名に渡ったという話です。幕末になると、学者など知識人たちの間では、外国への関心が高まっていました。ドイツ人医師であるシーボルトが来日したのは、まさにそんな時期でした。

シーボルトは、東洋の研究に強い関心を持ち、日本と唯一の貿易国・オランダに入り、文政6年(1823年)、長崎の出島のオランダ商船付きの医師として来日しました。彼は、医学だけでなく、植物・動物・地理・天文学など最新の西洋科学に造詣が深く、長崎市外に診療所兼学塾を設けて、多くの人々を教育していました。また、親日家としても知られ、日本滞在中にお滝と結婚。娘・イネも誕生しています。

名古屋の植物学者・水谷豊文は、早くから長崎のシーボルトと文通をして交流を深めていて、シーボルトがオランダ商館長の江戸参府に随行した際、道中を利用して名古屋を訪れた時、水谷は弟子の大河内存真、存真の弟・伊藤圭介とともに熱田で会っています。

シーボルト自身の著作『江戸参府紀行』によると、文政

9年(1826年)3月28日、桑名から陸路で佐屋に向かい、翌29日、日光川を渡って津島、そして、砂子川(現・新川)を渡り、正午頃、熱田に到着。そこで、水谷と大河内、伊藤が合流しました。シーボルトは、水谷のコレクションの豊富さに驚き、彼を「植物学の偉大な友」と称賛。3人はその日の宿である池鯉鮒(現在の知立)まで籠に乗ったシーボルトに付き添い、日本の植物に関して熱心に説明しました。

そして、シーボルトは江戸からの帰路にも名古屋を訪れました。5月27日、激しい雨の中、鳴海に到着、遅くなって熱田の宿に入ります。水谷らは再び彼を出迎え、夜中の3時頃まで語り合ったといいます。そして、翌朝7時過ぎに七里の渡しで桑名に向けて出発。水谷らは常夜灯あたりでシーボルトを見送りました。

シーボルトの来名は、地元の学者に多大な影響を与えました。日本初の理学博士となった伊藤圭介は、後に長崎まで出かけ、シーボルトから直接教を請うています。

その後、文政11年(1828年)、シーボルトの帰国直前にシーボルトの積み荷から海外に持ち出すことが許されていない禁制品、すなわち日本地図が見つかり、シーボルトは国外追放されてしまいます。俗にいうシーボルト事件です。



アポロンとコロニスの子・アスクレピオス 天上に引き上げられ医薬の神に

シーボルトが医師をはじめとする学者の向学心に刺激を与えたという話でしたが、ギリシャ神話で医薬の神といえば、アスクレピオスです。太陽の神・アポロンとラリッサ王の王女・コロニスの子ですが、その経緯は次のようです。

アポロンとコロニスは相思相愛で、やがてコロニスはアポロンの子を身ごもります。しかし、アポロンは多忙な神託の仕事のせいで、しばらくコロニスに会うことができませんでした。その頃のカラスはまだ真っ白い羽根をしていて、人間の言葉を理解したり話したりすることができたので、アポロンはカラスを使者として二人の連絡係に命じます。

ある日、カラスがラリッサに行くと、コロニスが若い男と親しげに話している姿を目にします。カラスはそのことをアポロンに報告しました。

嫉妬で激情したアポロンは、その場でラリッサに向けて矢を放ちました。矢の名人・アポロンの矢は、コロニスの胸を見事に射抜きました。アポロンの怒りは、報告したカラスにも向けられ、喪に服すようにと、純白の羽を真っ黒に変

えてしまいました。カラスの羽根が黒くなったのは、この時からです。

激情した自分の行動を後悔したアポロンは、すぐにラリッサに行きます。しかし、時すでに遅し。コロニスの遺体は荼毘に伏されようとしていました。アポロンはせめて子どもだけは救おうと、火の中から胎児を取り上げました。この子が、アスクレピオスです。

アポロンは、アスクレピオスをケンタウロス族の賢者・ケイロンに委ねました。ケイロンは、医学の術に長けていて、アスクレピオスに医術を教えて、立派な医師に育て上げました。その腕は、どんな重病人も治し、死者すら蘇らせるほどでした。

しかし、人間が不死になるのを恐れたゼウスは、アスクレピオスを雷火で焼き殺してしまいました。これに抗議したのが、息子・アスクレピオスを愛していたアポロン。それが認められ、アスクレピオスは天上に引き上げられ、医薬の神となったのです。

アスクレピオスがケイロンから薫陶を受けたように、伊藤圭介地元の学者もシーボルトから薫陶を受け、自分の道を極めていったのでしょうか。



▲名古屋の学者たちがシーボルトを見送ったとされている七里の渡しの常夜灯。

※次回は、熱田の本遠寺伝説を特集します。お楽しみに。

■写真/Kiyoshi K ■イラスト/Rei ■取材文/Icarus